内水試　かわら版　No. 145　　1996. 5. 22

なぜ、漁獲量は減ったか－9

ワカサギ・シラウオ

霞ケ浦、北浦におけるワカサギとシラウオの漁獲量は、図１に示したように大きな変動はあるものの、この二つの魚種はおおまかにみると、同じような推移を示していることがわかります。

これはワカサギとシラウオが食性や産卵時期（厳密にはワカサギはシラウオより幾らか早い）など、生態的に似ていること、主な漁獲方法が同じであることなどによるものと思われ、したがってこの二つの魚種の漁獲変動も、同じような理由によるものではないかと考えています。

ワカサギやシラウオは昭和４０年代に入ってから、急激に漁獲量が減少し現在に至っていますが、その原因として、一つは漁獲の主体が帆曳きからトロールに代わったことによって、産卵親魚の量がこれまでより、少なくなったことにあるとされています。

二つ目として卵から漁期始めまでの、歩留まりの低下が考えられていますが、その要因として、稚仔魚期の餌不足と混獲による間引きがあげられています。

漁獲量が減少し始めたころ逆水門も操作され始め、利根川からの水が全く湖内へ入ってこなくなりました。

その結果、動物プランクトン（ワムシ類）の餌として有効な、植物プランクトンの珪藻類の発生量が少なくなり、ワカサギやシラウオの稚仔魚期の餌が、不足するようになったのではないかと推測しています。

加えて護岸の整備による藻場の消失も、ワムシ類の発生量減少の一因になっているものと考えられています。

同じ頃、ハゼ類も急激に増加していますが、このハゼ類の３～４割を占めているウキゴリと、ワカサギやシラウオの稚仔魚期とはほぼ同じことから、これらの魚種の間で、餌の奪い合いが起こっているものと思われます。

図２は６月のハゼ類の漁獲量（殆どがウキゴリとみられる）と、その年のワカサギやシラウオの漁獲量との関係をみたものですが、６月のハゼ類の漁獲量が多い年は、ワカサギ、シラウオとも漁獲量は少なく、逆に６月のハゼ類の漁獲量が少ない年は、多い傾向がみられています。

また、この時期はハゼ類の漁獲割合が高く、ハゼ類の漁獲量が多い年は操業数も多くなって、ワカサギやシラウオの混獲される量も多くなることが予想されます。

この考えによれば、昨年の北浦でのワカサギの好漁は、５月に起きた「水変わり」による酸欠でハゼが死に、その結果ワカサギやシラウオにとって、好適な環境になった結果であると説明することができます。

ところで、最近、シラウオの漁獲量が増えていますが、これも近年のハゼ類の減少が、特にシラウオの餌環境に、有利に働いている結果ではないかと推測されます。

一方、ワカサギにとってもシラウオ同様に、漁獲量の増加として表れてよい筈ですが、おそらくワカサギの産卵量の低下等、他の要因による影響の方が大きく、漁獲量の増加にまでは至らないのではないかと考えられます。

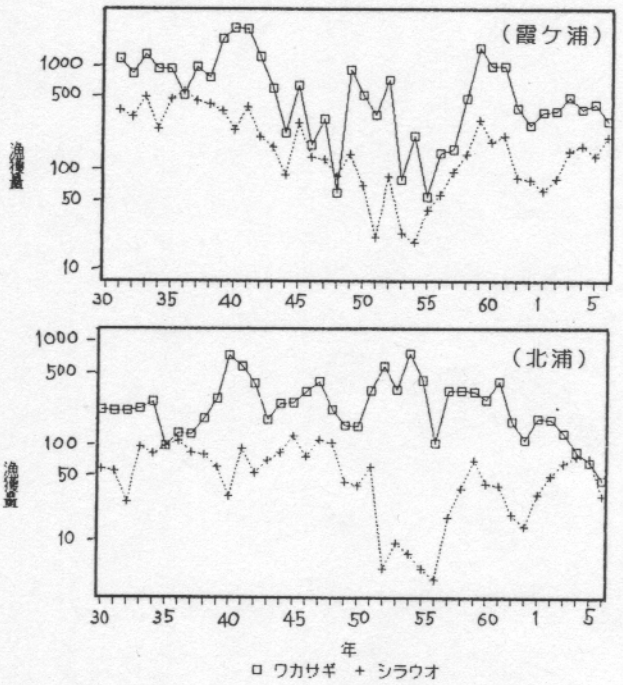

図１　ワカサギ・シラウオの漁獲量の推移

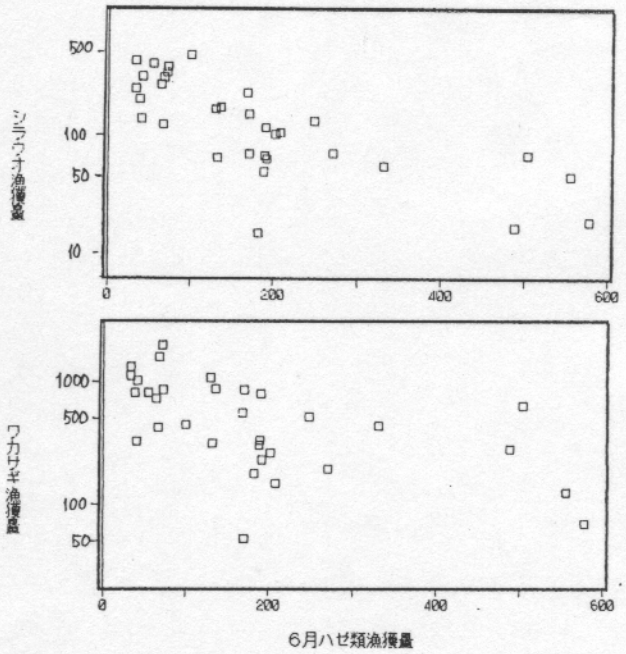

図２　６月のハゼ類の漁獲量とワカサギ・シラウオの漁獲量との関係（霞ケ浦）

茨城県内水面水産試験場（☎0299-55-0324）

茨内水試